

「人類社会の進化史的基盤研究(3)」 第5回（通算第14回）研究会

日時:2015年2月14日(土) 午後1時～7時00分

場所:AA研棟3階マルティメディアセミナー室(306号室)

報告者:

1. 早木仁成 (AA研共同研究員、神戸学院大学)
2. 田中雅一 (AA研共同研究員、京都大学)

内容 (要旨)

1. 連続と不連続－移籍再考 [前編：認知と共感－他者理解の進化] (早木仁成)

海を回遊するイワシの群れは、海中で撮影された映像などを見れば、その群れ自体が白銀に光る巨大な生物のようである。マグロなどの捕食魚がその群れに突進すれば、群れはあっという間に伸縮して突入をかわし、再び元の巨大な姿に戻る。個々のイワシ個体は、巨大生物の一部品であるかのように、互いに同調し、協調して群れを維持している。渡りをする鳥類の群れや、長距離の季節移動をするヌーの群れなど、「無名の群れ」を形成する多くの動物たちは、その群れを維持するために周囲の他者と見事に同調する能力を備えている。このような周囲の他者と共振して行為を一体化させる能力を<同調能力>と呼ぶことにする。同調能力は、おそらく捕食者対策として進化したと考えられるが、その起源はかなり古いということが予想される。

ニホンザルのように安定したメンバーシップの顔見知りの集団を形成する動物が、その集団を維持しながら遊動することができるのは、移動・休息・採食などの活動のリズムを集団内の他者と同調させているからだろう。外敵や捕食者などが出現した場合には、ばらばらに逃走するのではなく、周囲の他者と同調して同一方向に逃走するし、場合によれば外敵に対して一斉に威嚇することもある。群れ内の個体が他者と同調して同一行動をとる場面は、さまざまな状況で見ることができる。

一方で、人間ほど、他者の行為に完全に同調することができる動物（哺乳類）はいないかもしれない。軍隊の行進やスポーツの応援に見られる動作の完全な同期は、行為の図式を共有した作弄的な同調である。演奏や合唱などの音楽や集団でのダンスなども完全な同期を要求する。重い物を協力して持ち上げるときには、呼吸を合わせる合図（せーの）を用いて同調し、単独では不可能な重量の物の移動を可能にする。

このような同調能力を基盤として、他者と情動や気分を共有することを<共感>と呼ぶことができる。ドゥ・ヴァール（2010）によれば、共感とは1億年以上も前からある脳の領域を働かせる。この能力は、運動の模倣や情動伝染とともに、遠い昔に発達し、その後の進化によって次々に新たな層が加えられ、ついに私たちの祖先は他者が感じることを感じるばかりか、他者が何を望んだり必要としているかを理解するまでになったという。

犬や猫が飼い主の気分をまったく読み取っていないとはとても考えられない。もちろんサルも同様である。動物、とくに哺乳類には、周囲の他者の気分や情動を感じ取る能力が備わっている。チンパンジーなどにしばしば見られる宥和行動、慰撫行動、仲直りなど、相手の興奮を落ち着かせたり、恐れを取り除いたり、元気付けたりする行動は、他者の気分や感情を読み取ることができなければ、ありえない。このような他者理解の方法を<共感による他者理解>と呼ぼう。共感による他者の情動理解は即時的であるが、それだけで

はうそをついたり、うそを見破ることは難しいかもしれない。

ヒトの乳幼児の他者理解は、いくつかの発達のプロセスを踏むようである。リード(2000)やトマセロ(2008)によれば、生後3ヵ月ごろまでに乳児は自己のエージェンシーと他者のエージェンシーを理解し始め、自己のエージェンシーのコントロールを学習し始める。生後9ヵ月ごろには、三項的な共同注意フレームを発達させて、「意図をもつ存在」としての他者を理解し始める。さらに、4~5歳頃になって、他者を「心をもつ存在」として理解するようになる。このような他者理解を<認知的他者理解>と呼んでおく。他者理解の発達はおそらく自己理解の発達と表裏一体の関係にある。

認知的他者理解も、共同注意の発現に見られるように、その始まりは他者(養育者)との同調、同一化にあると考えられる。他者も自己と同様に意図をもつ存在であること、すなわち他者の自己性を理解すると、他者の視点で物事を見ることが可能になる。ただし、この他者理解は自己理解の成熟度に応じたものである点には注意を要する。ごっこ遊びにふける幼児は、遊びのなかで自分以外の他者になる経験を延々と積む。ごっこ遊びにおいて役を演じることは、自分以外の他者の視点で事物を操作することである。といっても、幼児たちは4~5歳になるまで、まだ「心の理論」の理解は十分ではないことが知られている。おそらく、この時点では<共感的他者理解>と<認知的他者理解>がまだ未分化な状態にある。

このようなヒトの乳幼児の他者理解発達過程は、多少モディファイすることで人類の進化史のなかに位置づけることができる(ミズン、2006)。おそらくヒト属が出現した頃、人類は「心をもつ存在」として他者を理解する認知能力を高め、それが他者への共感能力をさらに高めたのだろう。認知的他者理解と共感的他者理解は、相互に影響を与えながら、共進化してきたのではないかと思われる。

認知能力の進化は、「私」と他者とのかかわりへの理解を深化させてきたが、一方で、共感による他者の情動理解は、共同で音楽をつくる人たちに見られるように、自己と他者の一体化を促進して「私」やその私と共同する「他者」を消滅させ、「私たち」という集団を生み出す。そこには同時に、「私たち」の外側にいる新たな「他者」が生み出されることになる。つまり、<私/他者>の消失が<私たち/他者>を生成する。

「私たち」とは、その構成員に期待されている事柄が共有されているという意味で、制度としての集団の端緒であり、<私たち/他者>の生成とその進化を検討することは、「集団」、「制度」、「他者」を統合することになる。

2. 「暴力とセックスからから他者を考える」(田中雅一)

性(セックス)と暴力は、自他の関係を考えるうえで無視できない。一般に性は自他の親密性を暴力は対立を表すと想定できるが、性暴力やサディズム(性のエロス化)という言葉が示唆するように、両者はときに結びつく。

他者研究に携わるにあたって私が念頭においているのは、本研究会でこれまで取り上げた集団や制度と同じように、マクロ(構造)の構築にミクロ(個人的なトランザクション)がどのように関わるのかという視点である。つまり、構造的な自他の分節世界と自他の境界構築(他者化、排除と包摂化)のせめぎあいに関心がある。自他の境界構築とは、自他関係の流動性を論じることでもある。たとえば、これまでの仲間(自己の延長)が他者になるとき、あるいは反対の場合、なにをきっかけとするのだろうか。そこではどのような

形で他者化が実行されるのだろうか。本発表ではその際暴力とセックスに注目する。同時に、暴力やセックスとは社会関係の構築や破壊にどのような役割を果たしているのかについても考察を進める。

さらに、他者表象における性や暴力の要素にも注目する。たとえば、過剰に性的存在は、私たちと違って淫乱、不道德、ふしだらとみなされ、本来ならあり得ない様な形で、性的に（ストレートにあるいは合意なしに）ふるまうことが正当化される。暴力についても同じことが言えよう。過剰に暴力的存在は、私たちと違って粗暴、野蛮、不作法であるとみなされ、暴力的だから危険だ、これを避けるために暴力的にふるまうことが正当化される。他者に向けられた暴力は、自集団の結束に不可欠である（ルネ・ジラル）と考えると、私たちはつねに他者を過剰な存在と表象し、自分たちの暴力的ふるまいを正当化し、さらに自分たちの結束を高めてきたのである。これは、エドワード・サイードが『オリエンタリズム』でオリエンタリストたちのオリエン表象について論じたことである。

以上のような問題意識から、まず自他の境界上に位置すると言える誘惑者ならびに誘惑の概念について説明する。つぎに具体的な事例として、セックスワークならびに名誉殺人について考察を行う。

誘惑は両義的な概念である。積極的には、親密な自他関係が成立するきっかけとなる行為であるが、同時に、人を陥れる危険な行為として警戒される。前者の意味での誘惑とは、自分の弱みを見せることで他者に能動的に関わる可能性を拓くことである。すると今度は他者が誘惑者となって、自己が能動的に行うことを促す。誘惑とは、能動と受動をめぐって自他関係がめまぐるしく変化する状況を生み出すことである。これに対し、後者の否定的な意味では、一見他者が能動的にふるまうような状況を導くかに見えて、最初から最後まで他者を支配し利潤を独り占めにするという自己（誘惑者）の意図によって統御されているような状況である。

セックスワーカーもまた誘惑者として表象される。否定的な意味では、ぼったくりや性感染症などのリスクを想定することができる。しかし、セックスワーカー自身はどう思っているのか。経済的な安定を目指して、多くのセックスワーカーは自分を指名してくれる常連客の数を増やそうとする。具体的には感情労働を駆使して顧客に好意を持ってもらうことである。しかし、それは顧客に勘違いを引き起こす危険な行為でもある。「好きならお金を払う必要はないだろう？」と主張されたり、ストーカー被害にあうからだ。

二つ目に取り上げるのは名誉殺人(honor-killing)である。名誉殺人とは、女性の不道德な行為がその家族や帰属集団（家族、親族、村落、カースト、宗教集団など）にもたらす不名誉を取り除き、名誉回復の手段として行われる暴力（当事者である女性やその相手の殺傷）を意味する。不道德な行為とは、婚前の性関係、親が認めない婚姻関係、そして妻の不貞などである。その特徴は、多くの場合家族（とくに父親、その兄弟、あるいは当事者の女性の兄弟）が女性の殺害に直接関わるという点である。つまり、自己の一部とも言える娘や姉妹が（誘惑者として？）性的な行為を行うことで、他者とみなされ、さらには彼女の行為によって損なわれた家族の結束を再生するために、殺されるのである。このような行為は地中海から北西インドまで広く認められるが、こうした地域出身の人たちの移民先にも拡散している。名誉殺人は、性と暴力が自他境界の侵犯と再生に深く関わっていることを示している。

参考文献

田中雅一 2009「エイジェントは誘惑する——社会・集団をめぐる闘争モデル批判の試み」

河合香吏編『集団——人類社会の進化』京都大学学術出版会.

田中雅一 2012「名誉殺人——現代インドにおける女性への暴力『現代インド研究』2: 59-77.

田中雅一 2014「現代インドにおける女性への暴力」椎野若菜編『境界を生きるシングルたち』人文書院.

田中雅一 2014「シングルを否定し、肯定する——日本のセックスワークにおける顧客と恋人との関係をめぐって」椎野若菜編『シングルのつなぐ縁』人文書院.